

# 音楽教育における「創作の原点」

～作曲家の視点からみた小学校音楽科教材の導入の在り方について～

塚 本 一 実

## ○はじめに

我が国への西洋音楽の輸入が公に始まったのは、明治2年（1869）、後期ロマン派音楽の時代である。当時の音楽文化を盲目的に学ぶことから始まったのが、我が国における西洋音楽の教育であるとすれば、そこから140年余りの月日を経た現在、日本の音楽文化・芸術をどのように捉え、探究していくべきかという課題は、研究者・創作者のみならず教育的見地からも大きな問題と捉えている。現代では、邦楽やポピュラーなども教材に取り入れ、さまざまな改革を教材から見るができるがその認識の下、検証する。

私は「音楽教育における音楽の原点とは何か」という疑問を持った。音楽を勉強していく、探求していくためには楽譜が必要である。現在、記譜法の中で一番優れているといわれる五線譜を使い、音楽を探求していくことは理にかなっている。つまり、音楽を勉強する、ということは伝統的西洋音楽を用いて勉強する、という考えには合点がいく。しかし、楽譜がなければ音楽が存在しない、というものではない。そこで、伝統的西洋音楽、記譜法に囚われることなく、自由に音を用いて楽しむ時間を創る、といったような個人的な感覚をもとに、“音楽教育における「創作の原点」”を体験させることができないか、と、考えた。教育出版社、教育芸術社の音楽の教科書を検証し、作曲家である筆者が、“小学校音楽科教材の導入の在り方”について具体例を用いて考察する。

## ○先行研究について

最近の研究、『小学校音楽教科書の研究：問題点と課題』（森下：2013）では、“ごく一般的な教員、できれば音楽が苦手な教員にも使いやすい教科書の必要性”が訴えられている。これは、「音楽の新たな様式」へつながる発展性を含む提案だと私は認識している。また、董は『日中小学校音楽教科書の比較研（3）：指導内容としての「伝統音楽」の取り組みを中心に（3. 内容と方法の国際比較、IV指導内容とカリキュラム）』（董：2009）において、一日本の「伝統音楽」の捉え方には、文化的な要素が多く含まれた「伝統音楽」の捉え方に基づいて、音楽の意味概念を超えた様々な音楽・文化の様式に取り組むようにしている。一としている。『音楽リテラシー育成のための基礎的研究（2）－小学校音楽科教科書のカリキュラムの検討を中心に－』（三村真弓、河邊昭子、福田秀範ほか：2009）では、

－音楽科授業における音楽活動を可能にするものは様々な音楽的能力である。この音楽的能力のうち、特に基礎となるものは音楽リテラシーである。音楽リテラシーとは、単に楽譜の読み書き能力のことを指すのではなく、その根底をなす、音高感、音程感、リズム感、音楽的語彙という音楽科の言語と、それらを獲得し使いこなす能力、すなわち、聴取力、弁別力、再生力なども含んでいる。－

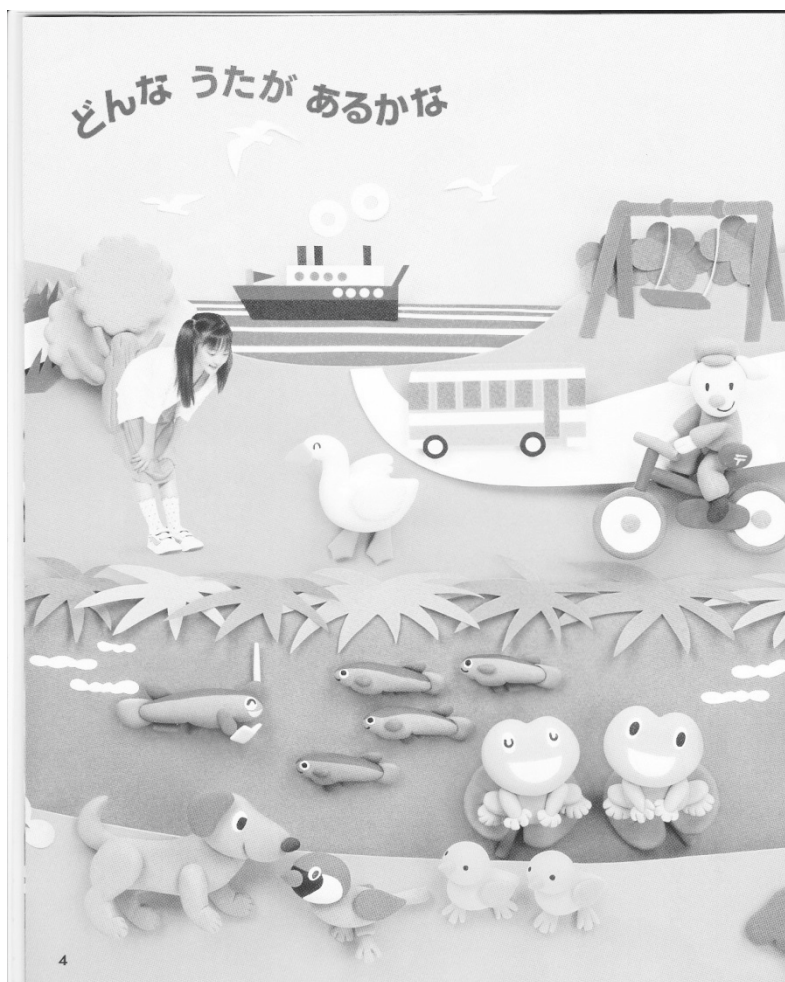
とある。そこで私は、現代の数多くの作曲家が挑戦している「新たな音楽様式へ発展する創作活動」、という観点から、また、日本の音楽基盤、音楽のリテラシー、伝統音楽という視点を踏まえ、日本の音楽教育の導入の仕方について考えたい。

○小学校1年の教科書についての検証（教育出版、教育芸術社）

・教育出版社（『おんがくのおくりもの1』平成22年3月10日検定済）について

まず、「あつまれ！おんがく なかま」（『おんがくのおくりもの1』p.2～3）で、アンサンプルの意識をもたせる、という始まりは現代に適していると言える。「どんな うたがあるかな」「えの なかから うたを みつけて、ともだちと いっしょに うたおう」（p.4～5）（図1）では、絵から想像力を膨らませ、自由な発想をもたせる、素晴らしい項だと思う。またこの項の行為は、読譜、記譜法につながると考える。

図1)



「うたで いっしょに あそぼう」(p.6～7)では、既成の楽曲「かもつれっしゃ」(作詞：山川啓介 作曲：若松正司)が用いられ、ト音記号、四分の四拍子、へ長調、小節、♩＝132～144ぐらいなど、西洋音楽の手法が使われている。図2)この西洋音楽の手法が現れる前に、もう少しいろいろな音楽の在り方、音を使った美の世界の可能性を広げるような項目があっても良いと考える(事項実施案参照)。

図2)

♩=132~144ぐらい

かもつれっしゃ しゅつしゅつしゅつ いそげいそげ しゅつしゅつしゅつ

山川啓介 作詞  
若松正司 作曲☆

6

「きいて おどって わくわく おんがく」(p.8～9)では、音の要素に「おどって」と、聴衆というスタンスではなく、参加型の音楽となり興味深い。つぎに「どんな かんじで うたおうかな」ではイメージを膨らませ、音楽の楽しさへとつなげる。そして「わらべうた」(p.14～15)となり、音楽がもつ特性“あそび”へと進む。この“あそび”という概念は音楽の根本であり、芸術の持つ最重要視して良い力、芸術だからこそ在り得る現象、勇気、活性という哲学的な範疇へと発展する基本原理だと私は考える。

つぎに「たん と うん で あそぼう」(p.16～17)では、拍の教育へ移る。この項で“リズム”という概念が出てくるが、もっと自由に音の原点に返り、音を“打音”という観点だけから捉えた、“音の点”という観念を学習者にとらえさせる形はできないだろうか(事項実施案参照)。また、この教材はリズムを西洋音楽の手法でとらえているため、つぎの「うたに あわせて りずむで あそぼう」(p.18～19)へ発展するが、リズムを前述の“音の点”のみの捉え方をした場合、この“音高”と“打音”の融合をどのように体感させるかは考案の余地がある(事項実施案参照)。音楽にとって“打”は、遊び感覚でとらえられる最大の要素であり、教育出版社『おんがくのおくりもの1』でもp.17～23で、多くの時間を使っている。

つぎは、音楽を聴くのものものとせず、参加型の音楽として存在させ、「からだを つかって どれみで あそぼう」へ発展する。この参加型の音楽は、音楽学者ハインリヒ・ベッセラーの実用音楽とも深い関わりがあり、“クラシック音楽”の発展につながる一つの在り方である(p.26～29)。

つぎに「音楽とは音を使って美を表現する」という定義の元、「音」にはどんなものがあるかを体感させる。まずは鍵盤ハーモニカを使わせ(p.30～37)、そして「みみを すまして おとを さがそう」(p.40)では、いろいろな楽音への体験となる。つぎの「がっきをつくって みよう」では、楽音以外の音の存在を認識させる。この楽音以外の音の認識に、

多くの時間を使うことは大切だと考える。“音”は音楽の源である。それが西洋楽器に限らず、さまざまな“音”が音楽の源であることを学習者に認識させ、そこから音楽をとらえさせる思考力はとても重要だと考える。また、単なる「音あそび」となっても良いと思う反面、教育とその時の「あそび」の境界線には注意が必要と思われる。

そして、「ようすを おんがくで」(p.44～49)、「みんなの おんがく パーティー」(p.50～53)など、「音楽の発想」へと教育は進む。

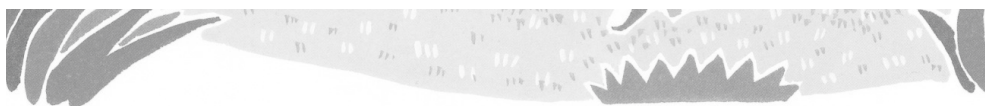
『音楽のおくりもの2』(教育出版社)では、『おんがくのおくりもの1』と同じような内容を行い、『音楽のおくりもの3』では西洋楽器、西洋音楽の下で教育が行われる。

この『おんがくのおくりもの1』と『音楽のおくりもの2』で行っている内容が、音楽の創作での非常に重要な事項で、新たな音楽の世界を創る源であると考えている。この源の下、発想や展開へと発展していく。この源の在り方で、たとえ到達点が西洋音楽であっても、その西洋音楽は既成のものとは違う新たな音楽の世界を創り出す可能性を秘めるものだと考える(事項実施案参照)。

・教育芸術社(『小学生のおんがく1』平成22年3月10日検定済)について

「みんなで いっしょに うたって、ともだちをつくりましょう。」(p.2～3)、「ともだちと いっしょに なかよく うたいましょう。」(p.4～5)では、楽譜等を一切用いず文字と絵だけを用いているところに、音楽に対する固定概念を植えつけさせない工夫があると見える。「こころのうた」(p.6～7)では、既成の楽曲「ひらいた ひらいた」(わらべうた)が用いられ、ト音記号、四分の二拍子、小節、♩=54～58ぐらいなど、西洋音楽の手法が使われている。図3)調性感の弱い、日本の童歌を用いているところに着目する(事項実施案参照)。

図3)



♩=54~58 わらべ歌

1 ひ らいた ひらいた なんのはなが ひらいた れんげのはなが ひらいた  
2 つ ぼんだ つぼんだ なんのはなが つぼんだ れんげのはなが つぼんだ

6

続いて p.8～25 では、拍についての教育が行われる。この間に使用される楽曲のうち、導音と主音の関係が重要な働きをする旋律は「しろくまの ジェンカ」(日本語詞：平井多美子 作曲：ケン ウォール)のみである。ほかの楽曲「かたつむり」(文部省唱歌)「じゃんけんぼん」(作詞：芙龍明子 作曲：橋本祥路)、「げんこつやまの たぬきさん」(わらべうた)、「ぶん ぶん ぶん」(日本語詞：村野四郎 ポヘミア民謡)、「うみ」(文部省唱歌 作詞：林 柳波 作曲：井上武士)では、導音と主音の関係が強く表れている旋律を用いて

いない。これは調性音楽への意識をもたない学習者への影響を考え、音楽＝調性音楽、という固定概念を創らせないような配慮であると考えられる。しかし、拍については、完全に西洋音楽の下でとらえさせている（事項実施案参照）。

つぎに“音”に対する教育を「けんぼんハーモニカを ふこう」（p.26～33）、「いろいろなおとに したしもう」（p.34～39）で行う。時間が少ないのではないか、という懸念をもってしまう。また、扱われる“音”のほとんどが楽音であり、ここではより多くの種類の“音”、つまり雑音や創作音をも体験させたい（事項実施案参照）。

そして「おとの たかさに きをつけて うたおう」（p.46～47）では音の高さへの教育が行われるが、“ど・れ・み”など、完全に西洋音楽の要素で音の高さを教育する。ここでは、音の高さだけに焦点を当てた教育方法は考えられまいか（事項実施案参照）。つづいて合唱・合奏への意識を植え付けさせ、使用楽曲には調性感が強く表れている。

『小学生の音楽2』（教育芸術社）では、合唱・合奏、拍、音の高さ、発想に焦点を当て、西洋音楽の下、さらに発展させて行く（合奏や合唱で友達との輪を重視している）。『小学生の音楽3』では音楽を芸術的観点から深く掘り下げていく流れとなる。

日本の音楽教育において、西洋音楽（主に調性音楽）が基盤となることは合点がいくが、その導入として、西洋音楽（調性音楽）の範疇から始まる事に大きな疑問を感じる。なぜならば、この導入の在り方によって音楽の捉え方が植えつけられ、西洋音楽以外の音楽（民族音楽、未知の音、など）の体験が、今後の新しい作品、新しい音楽様式と深い関わりがあると考えるからである。また、教育で扱われる音楽は「名曲」である必要があり、既成の楽曲を基に教育が行われていく。その源は“音”に対する意識、音楽の諸要素であり、音楽リテラシーである。音楽自体の定義は多様であり、未知のものへと発展するものであり、そこへ向かう勇気や野心が育まれるからこそ、人類にとっての芸術の必要性が満たされるのではないか、と考える。

### ○筆者の5つの実施案

以下の項目を音楽の要素とし、そこに照準を合わせた実施案を考えた。

#### 一 “音” 選び

留意点：楽器に囚われない。音ならすべて良し。その結果“音”は声か打となる。邦楽器の音も最初に体感させたい。

#### 「音” 選び」における実施案

まず、教室にある音の出るものを探す。“音”とは空気の振動であり、その振動が鼓膜に届き脳が知覚する、という定義の元、音を探させ、“自由に”音に対する意識をもたせる。同じ音（机をたたく音など）でも、叩く場所によって違う音となる（音色と音高）ことを体感させる。かなり教室内が雑然となることが予想されるが、それは、好奇心からくるエネルギーと捉え、自由に音探しをさせ、そして、その結果を検証する。おそらくその“音”の多くは、打音となることが予想される。またそれに加え、声も“音”であることに認識を醸成させることは大切である。

このように自由に“音”について体感させる時間を多く持ち、その結果、現在では西洋楽

器、邦楽器、民族楽器などの楽器の音があることを教える。ここでは自由に音に接して欲しいため、楽音と雑音の差異は一切考えない、触れないことが望ましいと考える。

#### ーパルス（拍）ー

留意点：パルス（拍）に囚われず、自由に音を出させる。言葉（言語）との関係を知覚させる。「パルス（拍）」における実施案

音を“打音”として用いることを条件とする。その打音を「できるだけ速く叩く＝A」、  
「一回だけ叩く＝B」、この二つを両極端とし、つぎは、もう少し「A」に近寄って、つぎは、  
もう少し「B」に近寄ってなど、「A」や「B」のいろいろなバージョンを体験させる。そして、  
皆で同時に同じことをするには、ある決まりごとが必要であることを提示し、何かの  
合図により打音させ、それが皆のまとまりになるよう行う。そこには“拍”が生まれてくる。  
また、「できるだけ速く叩く＝A」を可能な限り長く続けさせ、不可能になった時点（疲れた  
時点）で止めさせる。これは最長のフレーズであり、これに対し、最短のフレーズは「一  
回だけ叩く＝B」である。

また、言葉を発しながら、打音させる。その際、言葉をシラブルに分け、打音と同時に言葉  
を発する。このことにより、リズム感が生まれ、リズムは言語と深い関わりがあるという  
認識へつながる。

#### ー音高ー

留意点：音高に囚われず、自由に音を出させる。「音”選び”」で発見した音を使う。  
「音高」における実施案

二つの音を選び出し、どちらの音が高いか、皆で意見を言う。その答えが一つにならなく  
ても全く構わない。音の高さは物理学ではヘルツで表されるが、音楽の場合は必ずしもそれ  
と一致しないケースが考えられる（雑音など）。ここでは音には高いと低いという概念がある  
ことのみを体感させる。

#### ー強弱ー

留意点：最大音量と最小音量を使う。“打音”を使い、前述の「一回だけ叩く＝B」を用いる。  
「強弱」における実施案

「できるだけ強く打つ＝C」と「できるだけ弱く打つ＝D」の二種類の音を叩かせる。そ  
して今度は「C」と「D」の間の強さ、その次はもう少し「C」寄りに、その次にはもう少し  
「D」寄りに、など、「C」と「D」のいろいろなバージョンを実施させ、音の強さを体  
感させる。また、「C」はどんな感じがするか、「D」はどんな感じがするか、全員で「C」  
や「D」を行うとどんな感じがするか、などを考えさせ、想像力が豊かになるよう発展させる。

#### ーフレーズ（まとまり）ー

留意点：呼吸を使う。一回で吐く息の長さをひとまとまりとする。声を使うことを条件とする。  
「フレーズ（まとまり）」における実施案

フレーズについて、パルスの項でも少し触れたが、これは一番重要な音楽の要素と考える。  
「できるだけ長く声を出し続ける＝E」「できるだけ大きな声を出し続ける＝F」「できるだ

け小さな声を出し続ける＝G」などを体験させる。その後、先生がある文章を朗読し、その句点「。」に合わせて声を切る。同じように読点「、」にも合わせて声を切る。このような形で、文章からくるフレーズ感を体感させる。声を切っている時、つまりフレーズとフレーズの間では音が無くなり、耳が呼吸をする。その結果、つぎの音を聴く力を耳が得る。このような感覚を植え付けさせることは、“音楽を聴く”という観点から考えても、とても重要な事項である。つまり、この事項から“聴衆（聴く）”という行為も身に付けていくことになる。

これらの学習（筆者が提示した5つの実施具体案）をいろいろなバージョンで、小学校1・2年の間に行い続け、それぞれの要素に対し、ありとあらゆる可能性を探求させ、その後3学年以降において西洋音楽を基盤にした音楽教育をしていく形が、今後の日本において、新しい音楽様式を生み出す土台作りという観点で考えると、非常に望ましいと考える。

### ○坪能由紀子氏の取り組み

『音楽づくりの授業アイデア集』－2012年4月10日第1刷発行－

坪能克裕（Dr. ひ～ろ～）、坪能由紀子、高須一、熊木真見子、中島 寿、高倉弘光、駒 久美子、味府美香 著（株式会社音楽之友社）

・「言葉を使って音楽をつくろう（p.28～29）」の項について

- ① 9～10人ぐらいのグループになって、それぞれのグループで「○○」（例：「しゃ」「りん」「ちゃ」など）の付く言葉を集めよう。
- ② 集めた言葉の中から、面白いリズムになりそうな言葉を4種類選ぼう。
- ③ グループのうちの1人は、拍打ちを担当。それ以外の人は、2人（3人）ずつに分かれ、4種類の言葉のどれを担当するかを決めよう。
- ④ それぞれの言葉のリズムを工夫して、4拍子で繰り返し言えるようにしよう。
- ⑤ それぞれの言葉をどのように重ねるか、構成を工夫して、言葉のアンサンブルをつくろう。
- ⑥ 「○○」のところだけ強く言うようにして、アンサンブルをまとめよう。

上記は、リズム等についての素晴らしい授業アイデアである。内容は6項目に分かれており、①～③が基礎、④～⑥が発展、と読み取れる。対象が中・高学年とあるが、これを小学生の低学年で行うことも教育的価値があると考えられる。

・「拍のない音楽（p.46～51）」の項について

「打つタイミングを工夫して（p.46～47）」について

- ① 金属の小打楽器で、音を十分響かす奏法と、響きをすぐ止めてしまう奏法
- ② 上の打楽器を、いろいろなタイミングで打ってみよう
- ③ その他にも、打つタイミングを工夫した音遊びを考え、試してみよう
- ④ タイミングを合わせ、合図なしで全員一緒に1回打つ練習をしよう
- ⑤ 今までのアイデアを組み合わせたリ繰り返したり、新たなアイデアを加えたりして、まとまりのある音楽をつくろう

①の項目は筆者の実施具体案のフレーズの項にも共通し、興味深い。余韻の長い打楽器の使用を1回だけ打ち、その余韻を最後まで聴かせることは、拍の概念の教育に加えて学習者に集中力を与える教育でもある。

『「拍節のないやりとり」で音楽をつくろう (p.48～49)』の項について

- ① 会話でゲームしよう
- ② 音で会話をしよう

対象が中学年以上とあるが、会話のキャッチボールを複数回ではなく、1回のみにするにより、低学年での教育へ盛り込むことも考えられる。

「紙で出せる音を組み合わせて音楽をつくろう (P.50～51)」について (図4)

- ① 紙を使っていろいろな音を出してみよう
- ② 紙を使った音で会話してみよう
- ③ つくった音を分類してみよう
- ④ 会話を豊かにしよう
- ⑤ グループ同士で聴き合おう

上記5項目は、①～②が基礎、③～⑤が発展と読み取れ、①～②の項目は、是非、低学年で実施したい(著書では中学年以上が対象)。

図4)

**拍のない音楽①**  
**紙で出せる音を組み合わせて**  
**音楽をつくろう**

対象 中学年以上  
共通事項 ●(ア) 音色、強弱、(イ) 間いと音と、音楽の音と横の関係  
ならい(た)った1枚の紙から、いろいろな音色や強い音・弱い音、音の高さが違う音が出せることを発見し、紙によるリズムや、紙による音の重ね方(音楽の縦と横の関係)を主として、音をつくりだす楽しさや高さの中で遊んでいきます。

①紙を使っていろいろな音を出してみよう  
今日は紙を使って、間にいろいろな音を出してもらいます。まったく人と違う、そして自分が前に出した音とも違う音を出してね。

えー、照しやう！  
そんなのできないよ！

【紙から出る音の出し方の例】  
・もむ (手で)  
・たたく (バチ、マレット、筆、布田たきなど)  
・つつく (指、箸など)  
・こする (指先で、手で)  
・擦る (紙をたたくなど)  
・ゆする (縦長の紙をゆする)  
・ゆる (紙を折る時の折りの音など)  
・はじく (指先でピンとはじくなど) ……など

【紙の種類別の例】  
・コピー用紙 A4～A5  
・ボール紙  
・新聞紙 (縦横紙)  
・厚紙 (1～5mm、大きさは多種)  
・セロハン系 (ラップ等)  
※「音の出し方」や「種類」の選択や組み合わせは、演奏の仕方により、子どもの表現の世界が広がります！

②紙を使った音で会話してみよう  
多、自分がつくった音や、他の人の音で「面白い」と思った音で、互いに会話をしてみてください。

【会話の例に使いやすい音の出し方の例】  
・もむ ・擦る ・たたく ・つつく

【いろいろな音を出してみよう】  
「いろいろな音を出してみよう」の音を出してみよう。

③つくった音を分類してみよう  
それでは、みなさんの出した音の特徴を整理してみましょう。出した音の特徴を教えてください。

長い音	短い音	大きな音	小さな音	それ以外の音
・もむ ・ゆする ・こする ・ゆする	・たたく ・ゆする ・つつく ・はじく	・擦る ・たたく ・つつく ・はじく	・こする ・もむ ・ゆする	……………

④会話を豊かにしよう  
音の出し方によって、いろいろな特徴のある音が出せます。次は、会話に他の音の音を入れて、もっと会話を豊かにしてみましょう。

【会話の例】  
A: …… B: …… C: …… D: ……  
※ドローンは、短い音で2つの音を持続させるもので、それによって音楽を支える役割を持つ。

⑤グループ同士で聴き合おう  
各グループがともも面白い、それぞれの音楽をつくりましたね。

では、それぞれのグループでつくった音楽を聴かせてください。

はーい！

音楽を聴く時は、演奏のよさだけでなく、「何が面白かったのか」をワークシートに書きこんでください！

※ワークシートは、「よかったところ」「面白かった理由」「自分たちが面白いと思った新しい発想」など、単に感想を書かせるものではなく、感想に対して音楽の工夫や構造に耳を傾けさせるものになります。

※会話のときは、相手の話を聴いて理解したり、間違って同じ演奏の仕方を取ったりすることがあります。その際、対立しているように演奏の仕方を変える手もあります。ただし、同じ演奏の仕方がある場合は、繰り返して、お話をささっと聴く時のように音を出さずようにするとういでしょう。お話をしている2人で、抱える感じや傾ける感じを、音や目で伝え合います。

図2章 音楽の要素からアイデアを得よう

③つくった音を分類してみよう

それでは、みなさんの出した音の特徴を整理してみましょう。出した音の特徴を教えてください。

長い音	短い音	大きな音	小さな音	それ以外の音
・もむ ・ゆする ・こする ・ゆする	・たたく ・ゆする ・つつく ・はじく	・擦る ・たたく ・つつく ・はじく	・こする ・もむ ・ゆする	……………

④会話を豊かにしよう

音の出し方によって、いろいろな特徴のある音が出せます。次は、会話に他の音の音を入れて、もっと会話を豊かにしてみましょう。

【会話の例】  
A: …… B: …… C: …… D: ……  
※ドローンは、短い音で2つの音を持続させるもので、それによって音楽を支える役割を持つ。

⑤グループ同士で聴き合おう

各グループがともも面白い、それぞれの音楽をつくりましたね。

では、それぞれのグループでつくった音楽を聴かせてください。

はーい！

音楽を聴く時は、演奏のよさだけでなく、「何が面白かったのか」をワークシートに書きこんでください！

※ワークシートは、「よかったところ」「面白かった理由」「自分たちが面白いと思った新しい発想」など、単に感想を書かせるものではなく、感想に対して音楽の工夫や構造に耳を傾けさせるものになります。

※会話のときは、相手の話を聴いて理解したり、間違って同じ演奏の仕方を取ったりすることがあります。その際、対立しているように演奏の仕方を変える手もあります。ただし、同じ演奏の仕方がある場合は、繰り返して、お話をささっと聴く時のように音を出さずようにするとういでしょう。お話をしている2人で、抱える感じや傾ける感じを、音や目で伝え合います。



・「第3章 いろいろな音楽からアイデアを得よう (p.56～88)」の中から  
「日本・東アジアの音楽から (p.62～69)」について  
「箏で即興!」「<箏で即興>を発展させよう!」「箏から広がるコトの世界」3つの項目に分かれているが、対象がすべての項目において高学年～中学生となっているため、学習者が実際に音を出すように考えられている。小学高低学年において、「音を聴かせる」だけはあるが、ここで日本の伝統楽器である箏の音を是非とも聴かせたい。そして「箏から広がるコトの世界」にあるように、ヤンチンなどに発展し、日本以外のアジアの既成楽曲にも低学年で触れさせたい。また、そのことにより、楽器と異国との関係、音楽のグローバル的要素を体感させたい。

「ポップスから」(p.70～75)について

「ブルースの音階であそぼう」「循環コードで即興を楽しもう」の2項目に分かれる。音楽教育においてポップスが重要なはたらきをする点は、ポップスの“歴史”と考える。日常生活でポップスはマスメディアから簡単に触れることができ、学習者も自然と歌ったり打ったりして、音あそびをしている。また、実施教材としてのポップスより日常生活で触れることのできるポップスの方が、新鮮で新しく、刺激も多い。音楽教育におけるポップスの役割は“歴史”だと考える。

・終章 (p.122～126) の項について

「即興的な表現体験しよう」など、即興を重視した文面が多くある。即興という行為は、音楽において非常に重要な事項であるが、子供より大人の方が知が多く理性が働いてしまうため、教える教諭にも訓練が必要であり、教諭も即興の楽しさを知る必要があるだろう。また、ここでは、学習者任せにし、自由になる勇気と責任を低学年で育てることは重要である。

『音あそびするものよっといで』－2012年8月20日 第1版発行－

トレヴァー・ウィシャート著、坪能由紀子 若尾裕 共訳 (株式会社音楽之友社)

・第1部の中から

「はじめに」(p.6)で、トレヴァー・ウィシャート<sup>1</sup>がグループによるゲームの存在の重要性を訴えている。“音あそび”の中には、“音によるゲーム”という意味も含まれると考える。低学年における遊びは非常に重要であり、“音によるゲーム”も“音あそび”の一つの手段として、大いに賛成できる。

「指揮者」(p.34)の項では、－このゲームではリーダーの役割が大変重要です。……(中略)……まずリーダーが何の取りきめもなく身振りだけで充分音楽らしいものをつくり出せれば

<sup>1</sup>トレヴァー・ウィシャート (Trevor Wishart) 作曲 / ヴォイス

70年代より一貫して「人間の声」を中心に作品に取り入れて発表している。「声」を素材に音響操作したコラージュ作品や電子音響音楽作品を制作し、彼自身もヴォイス・パフォーマーとして活動している。また、実験的な新しい切り口で子供のための教育的作品に取り組み、面白い音楽ゲーム集「ミュージック・ファン」を発表。著書「音遊びするものよっといで1, 2 (音楽之友社)」

一番良いのです。……（後略）－とある。この「何の取りきめもなく」という点が非常に重要で、音楽（芸術）の根本を体感させている。現場としては、実現が難しいだろうが、教諭が数多くの見本を見せるなど本にある手順やヴァリエーションを参考にし、是非とも成功して欲しい。

『小学校 新学習指導要領 ポイントと授業づくり 音楽』

－ 2009年2月10日 初版第1刷－

金本正武 坪能由紀子 編著者（株式会社東洋館出版社）

・「年間指導計画作成のポイント（p.51～91）」の中から

第1学年および第2学年の年間指導計画例（p.68～75）の中で、－第1学年の年間指導計画は、この目標を踏まえ（後略）－とあり、この目標の一つに一楽しく音楽にかかわり、音楽に対する興味・関心をもち、音楽経験を生かして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣を育てる。（p.68）－とある。これが音楽教育の導入の最初の目標となるが、この目標の前に、音に対する可能性の追求をより多く体感させたい。「楽しく音にかかわり、音に対する興味・関心をもち、（後略）」など。また、同じ項に－（前略）学校や地域の特色、行事や諸活動などとの関連を図って作成していく。（後略）－とあり、この「学校や地域の特色」という言葉に観点を置き、音楽教育を行うことは重要だと考える。実施するに当たり、地方の学校はやり易いが、それに比べ首都圏の学校は特色を見出すのに苦労すかもしれない。これは、実際に地域に参加できる環境があるか否かにかかわるためであるが、地域で体験できることが一番良いと考える。そして音楽教育ではもう少し後の学年で、“知”をもって、音楽を通して地域の文化と密着させ、文化の存在・創造性を体感させることを望む。

『小学校 学習指導要領の解説と展開 音楽編』－ 2008年8月17日 初版第1刷発行－

坪能由紀子 伊野義博 編著（教育出版株式会社）

・「教育課程改善の基本方針と音楽科（p.2～30）」の中から

「生きる力（p.4～5）」では、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、（後略）」とあり、この事により“豊かな情操が養われます。”とある。これに加え、音楽の持つ特性「活気・鼓舞・エネルギーへの関連性」、創作や人前での表現で育まれる「勇気」などを「生きる力」として挙げたい。

・「音楽づくりを中心とした授業の展開（p.106～113）」の中から

「2学年 からだの音でリズムをつくろう！（p.106～107）」では、体の音を使って音楽教育を行う授業展開が書かれている。ここで、“体の音”の中に、心臓の音を察知する方法も考えられる。これは音楽において非常に重要かつ見失われがちな、“音のない音楽”を体感させる絶好のチャンスであると考えられる。

『小学校 新学習指導要領の展開』－ 2009年1月 初版刊－

佐藤日呂志 坪能由紀子 編著（明治図書出版株式会社）

・「年間指導計画作成モデル 第1・2学年（p.40）」について

図5）表中「主な教材」の項で使用される楽曲のモデルが示されているが、様々な国の曲をより多く取り入れることが大切と考える。しかし、歌詞の関係上、外国の曲は“ラ・ラ・ラ”などで歌わざるを得ず、メロディーのみの体感に留まる。

図5）

40

### 3 年間指導計画作成モデル

#### 第1学年 音楽科年間指導計画（作成例）

期	月	題材名【活動分野】（時間）	ねらい	・歌唱、器楽教材
				主な教材
前 期	4 ・ 5	うたはともだち 【歌唱・鑑賞】(9)	音楽活動の楽しさに気付いて、進んで表現しようとする意欲を育てる。	・さんぼ ・かもつれっしゃ *ひらいたひらいた ◎ミッキーマウスマーチ
	6	けんぱんハーモニカともだち 【器楽】(6)	階名で横唱や暗唱をし楽器で演奏する。	・どんぐりさんのおうち ・どれみのキャンディー ◎ひびけけんぱんハーモニカ *日のまる
	6 ・ 7	おんがくにあわせて 【音楽づくり・鑑賞】(8)	拍の流れを感じ取って、簡単なリズムや旋律を表現する。	・じゃんけんぼん ・はしきしゃぼっぼ *かたつむり ◎日本のわらべ歌 ◇短い旋律づくり
	9 ・ 10	リズムにのって 【歌唱・器楽・鑑賞】(10)	リズムを感じ取って聴き取ったことを生かして、歌や楽器で表現する。	・ぶんぶんぶん ・てをたたきましよう ◇音楽遊び ◎アメリカンパトロール ◎白くまのジェンカ *うみ
後 期	10 ・ 11	いいおとをみつけて 【音楽づくり・鑑賞】(9)	音や響きの違いに気付いたり、音の出し方を工夫したりして、音楽づくりをする。	・おとのマーチ ◎おもちゃのバッサカリア ◎おもちゃの兵隊
	12 ・ 1	ようすをおもいうかべて 【歌唱・器楽・鑑賞】(10)	場面を想像しながら、歌い方を工夫したり、想像した様子から音を選んで楽器で演奏したりする。	・おむすびころりん ◎2匹のこねこのゆかいな歌 ◎おどる子ねこ
	1 ・ 2	みんなであわせて 【歌唱・器楽・鑑賞】(10)	楽曲の気分を感じ取り、声や楽器を合わせて表現する楽しさを味わう。	・きらきらぼし ・こいぬのマーチ ◎ほしのおんがく ◎かえるのルンパ
	3	のびのびとうたって 【歌唱・器楽・鑑賞】(6)	発音や声の出し方に関心をもって歌ったり、みんなで声を合わせて歌う喜びを味わったりする。	・てをつなごう ・そろそろはるですよ ・お別れ式の歌 ・君が代

・「身体を動かす活動（p.98～99）」では、「速度の変化」、「音の高さ」や「強弱」についての授業実践例が書かれている。ここからヒントを得、「速度の変化（既成楽曲だけに頼らずいろいろな音で）」にあわせ、学習者が走る速度を早くしたり、遅くしたりし、速度の変化を体感させることを「音の高さ」や「強弱」（既成楽曲だけに頼らずいろいろな音で）」にあわせ、背伸びをさせたりしゃがんだりさせる授業展開も有意義ではないかと考える。これはある種、体育を合体させた授業となり「音楽から得る精神的“活気・鼓舞”」と「肉体の

運動からくる“活気・鼓舞”となり、自閉症・引きこもりなどの防止につながることも期待できるのではないかと考える。

日本の伝統芸能（歌舞伎、能、狂言など）の次に、明治維新により西洋の文化が日本に入り、その後英米文化の発展によりジャズ・ポピュラー音楽が盛んとなった「日本の音楽文化の歴史」を踏まえ、新たな音楽様式が生まれる可能性の高い現在、日本の音楽教育の導入の在り方、音楽の定義を体感させるような導入、この状況によって、新たな音楽様式への模索、認識が変わってくると考える。

### むすびにかえて

戦後70年近くなる現在、音楽の在り方、音楽教育の在り方が厳しく問われている時代に入っている。多くの作曲家が新しい作品を現代に創り、その作品（現代曲）をこの「音楽教育における音楽の原点」と考える授業アイデアもある（「音楽づくりの授業アイデア集」、音楽之友社）。音素材としては素晴らしいが、音楽としてはどうだろうか。現代の作曲家である筆者もこの行為に大いに期待を寄せるが、教材として現代音楽を用いることにはいささか時期尚早と言わざるを得ない。音楽教材は名曲を扱う、名曲の脅威が教育の域に達すると考えるからである。では、その名曲と判定を下すのは時代であり聴衆であり、名曲か否かを判断する土壌として、現代の「音楽教育における音楽の原点」の在り方では視野が狭いと考え、この論文の具体例を用いた考察を書くに至った。新たな名曲を発生させていくことは作曲家だけの仕事ではなく、聴衆の存在が重要であり、この論文の考察が新たな名曲を生む土壌作りへつながると考える。

音楽の中でも筆者が重要視している「勇氣、衝撃、初体験」などを思いっきり体験させることが、音楽教育の中での最重要事項と考え、そこには「音楽教育における創作の原点」を見つめていく必要があり、そして、それは音楽文化の発展へとつながる事項と確信している。現代音楽の作曲家である私は「音楽とは何か」という問いかけをいつもしている。現代音楽の多くは、無調で書かれている。無調とは調が存在しない様式の事だが、その考えの土台は調性音楽であることに気付く。音楽様式には調性音楽だけでなく、未知の音楽様式を含め、様々な魅力ある様式が数多くあると思う。そして、魅力ある新たな音楽様式を創り出すことが現代の作曲家の仕事である。多くの人が音楽教育の入口で、伝統的西洋音楽に触れる教育を受けている状況が現代の日本であり、人が初めて触れる音の美が伝統的西洋音楽に断定されている形に疑問を持ってしまう。しかし、それに変わる新たな様式が存在していないことも事実であり、また、新たな様式を生み出す土壌に固定概念は取り除きたい、ということも真意である。本論文は、新たな音楽様式を創り出す現代の作曲家が、音楽教育の入口、「音楽とは何か」を考える土壌のあり方を検証し実施具体案を用いて考察した。

“音楽教育における「創作の原点」”という観点から、まず、様々な“音”、より多くの“音”、この世に存在する無数の“音”へ学習者の意識を向けたい。そして、そのある音の“特色”“高低”“強弱”などを体感させ、その中から“音の集まり（フレーズ）”が生まれ、音の連なりによる“形”が現れる。このような流れの中、既成楽曲に囚われず、“音”そのものから音楽の要素を体感させ「創作の原点」という視点を学習者にもたせたい。そのためにも、“音”そのものに対する音楽教育にかける時間は、より多く必要と考える。

## 小学校における音楽科の授業時数等の変遷

昭和 36 年度～（昭和 33 年改訂）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
音楽	102 (3)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)

昭和 46 年度～（昭和 43 年改訂）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
音楽	102 (3)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)

昭和 55 年度～（昭和 52 年改訂）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
音楽	68 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)

平成 4 年度～（平成元年改訂）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
音楽	68 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)

平成 14 年度～（平成 10 年改訂）

	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年
音楽	68 (2)	70 (2)	60 (1.7)	60 (1.7)	50 (1.4)	50 (1.4)

※ 表中の数字は年間の授業時数。括弧内の数字は週当たりの授業時数。

※ 表中の 1 単位時間は 45 分。

文部科学省ホームページより

## 参考文献

坪能克裕 (Dr. ひ～ろ～)、坪能由紀子、高須一、熊木真見子、中島 寿、高倉弘光、駒 久美子、味府美香 著

『音楽づくりの授業アイデア集』 株式会社音楽之友社 - 2012 年 第 1 刷発行—  
トレヴァー・ウィシャート著、坪能由紀子 若尾裕 共訳『音あそびするものよっといで』 株式会社音楽之友社 - 2012 年 第 1 版発行—  
金本正武 坪能由紀子 編著者『小学校 新学習指導要領 ポイントと授業づくり 音楽』 株式会社東洋館出版社 - 2009  
年 初版第 1 刷—

坪能由紀子 伊野義博 編著

『小学校 学習指導要領の解説と展開 音楽編』 教育出版株式会社 - 2008 年 初版第 1 刷  
発行—

佐藤日呂志 坪能由紀子 編著

『小学校 新学習指導要領の展開』 明治図書出版株式会社 - 2009 年 1 月 初版刊—  
文部科学省ホームページ[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/029/siryu/06051225/004/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/029/siryu/06051225/004/004.htm)

森下修次 著

『小学校音楽教科書の研究：問題点と課題』（2013）

董 芳勝 著

『日中小学校音楽教科書の比較研(3):指導内容としての「伝統音楽」の取り組みを中心に(3.内容と方法の国際比較、IV指導内容とカリキュラム)』(2009)

三村真弓、河邊昭子、福田秀範、中村将之、青原栄子、大橋美代子、吉富功修、徳永 崇、長澤 希 著

『音楽リテラシー育成のための基礎的研究(2)－小学校音楽科教科書のカリキュラムの検討を中心に－』(2009)

#### 参考資料

教育出版社 『おんがくのおくりもの1』 平成22年3月10日検定済

教育出版社 『音楽のおくりもの2』 平成22年3月10日検定済

教育出版社 『音楽のおくりもの3』 平成22年3月10日検定済

教育芸術社 『小学生のおんがく1』 平成22年3月10日検定済

教育芸術社 『小学生の音楽2』 平成22年3月10日検定済

教育芸術社 『小学生の音楽3』 平成22年3月10日検定済